

第9分科会「里山と文化・伝統」

シンポジウム「里山の景観とその保全」

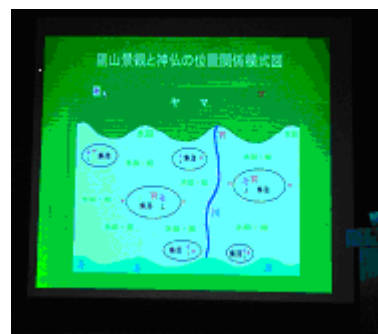
日 時：2006年4月30日（日）13:30～16:15

場 所：千葉県立中央博物館 講堂

参加者：40名

趣 旨

持続可能な社会の実現と里山保全に向けて、今回は、「里山の景観とその保全」にスポットライトを当てます。縄文的なくらしから始まって、江戸、明治、そして現代までに変わってきたわたたくしたちの暮らしを振り返り、景観に配慮したこれからの里地里山の保存と創出を文化・伝統と言う目線から考える良い機会でもあります。地域の文化資源や自然資源など、心が癒される空間をもっと知って、地域おこし等、広い視点からの新たな提案につながるような話し合いの場づくりから始めて行きたいと思います。



基調講演「里山の景観とその保全:文化の表象としての景観」

原 慶太郎（東京情報大学）

里山景観の保全は持続的な農林業が営まれることではじめて成り立つ。その鍵になるのは、経済的に裏付けられた農林業の担保（それには景観を保全することに対する経済的な支援も含まれる）と、そこに暮らす人びとが里山の伝統と文化を再認識し、その伝承者であるという誇りをもつことであると考えます。そして、そのような文化の世代間の伝承という縦の「つながり」を再生し、さらに、都市住民などと地域間の伝播による横の「つながり」を形成することで、「里山文化の表象としての景観」の保全を確固たるものにしていかなければならない。



講演1「縄文時代のムラの分布変遷」 清藤 一順（千葉県立中央博物館自然誌・歴史研究部）

旧石器時代～縄文時代の初めにかけての移動生活に代わり、縄文時代の今から約7千年前頃の千葉県では「ムラ」が営まれ、人々は四季をとおして一定の土地に生活するようになりました。これらの「ムラ」には数軒の竪穴住居が造られましたが、他に墓・ゴミ捨て場・マツリの場・生産の場などによって構成され、今日の「里山」の発生とも言えるかもしれません。これらの縄文時代の遺跡や古代・中世・近世の人々によって創られ、残された歴史や文化財、そして、様々な習慣・遊び・芸能などの文化も今日の「里山」を構成する重要な要素のひとつです。保存すべき「里山」の実態は極めて広範・複雑であり、これらを整理し、体系化することにより今後の道標を設置することが急務です。

講演2「東京湾沿岸の中期拠点集落を支えた海と山」

上守 秀明（千葉県立中央博物館自然誌・歴史研究部）

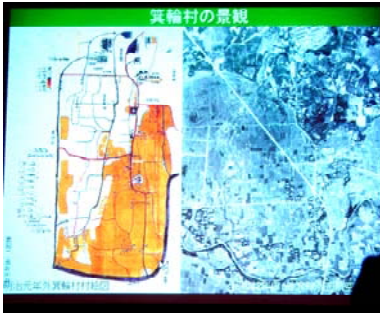
縄文人は海や山から得た資源をどのように利用したのか。今回は縄文時代中期の大型貝塚を伴う拠点集落が数多く所在する東京湾東岸地域での調査成果を例にとり、このことをお話しします。

これらは「集中居住」「通年定住」「大型貝塚の形成」という共通したキーワードを持つよく似たムラで、海と山、両方に行き来しやすい里山景観の中に立地していたと考えられます。出土資料の詳細な分析から、ここでの資源の豊かさや生産性の高さが理解できますが、一方で資源保護や循環型の資源利用に彼らが力を注いでいたことも分かります。



講演3 「里山景観と神仏：里山景観を維持する神仏の存在と歴史的な変遷」

笹生 衛（千葉県教育庁教育振興部文化財課）



里山景観の中に、神仏や信仰の場が重層的に存在し、それは毎年繰り返される人々の生活の安全や生産活動の安定を精神的に保証し、意味づけるシステムとして機能していたが、明治末期以来の農・漁業の機械化、集落周辺の耕地の宅地化、山林内の開発などにより、このシステムの機能が失われつつあるのが現状かと思われます。

講演4 「里山を守る力の可能性：里山の未来を担う子どもとの関わりを通して」

島立 理子（千葉県立中央博物館 房総の山フィールドミュージアム）

里山の景観を守っていくには、大人だけではなく子どももいっしょに実際に里山知ることが大切。そのためには、子どもが地域社会の一員として、地域の伝統を守り、育てることに誇りを持てるような活動が必要である。

パネル討論「里山の景観とその保全」

コーディネーター 佐久間 豊

パネラー 清藤一順・上守 秀明・笹生 衛・島立 理子

現状

- ・ 働き手の高齢化
- ・ 仕事場と生活の場の乖離
- ・ 人と人とのつながりの希薄化

課題

1. 縄文時代以降、それぞれの時代の里山景観が、現在の里山の中にどのように残されているか。また、現在社会にどのように関わっているか。
2. 各時代の人々は、どのようなルールの中で、自然との共生を図ってきたのか。
3. 里山景観の保全を言う場合、たとえば多くの産業廃棄物処分場などが必要となる現代社会では、どのように調和を図るのか。

結論

里山景観の保全には持続的に農林業が営まれることが必要と思われる。

まとめ

経済的に裏付けられた農林業の担保とそこに暮らす人々が里山の伝統と文化の大切さを認識して、その伝承者としての誇りを持てることが必要。

